



来[5]

3月4日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

3月4日のおはなし「来[5]」

部屋を片付けてさっぱりしたら、景気のいい声が近づいて来た。

「や。片付きましたか！」
景気のいい声の持ち主は、
景気のいい身振り手振りで入ってくるなり、
景気のいい表情でそう言った。
「結構、結構」

両手をさささっとすり合わせたかと思うと、ぱんっと景気のいい音を立てて打ち合わせた。ぼくは男の様子をほれほれしながら見ていた。本当はぼくから家を巻き上げてしまう大悪党なのだが、この景気のよさは尋常じゃない。ここまでいくと芸の域だ。見るのに金を払ってもいい。っていうか、家を明け渡すわけだが。

「それじゃぼくはこれで」
「いやいや」景気のいい声の持ち主は、実に景気のいいタイミングでぼくの言葉を遮ると、驚くべきことを言った。「それじゃまるでアタシが貴兄から家を巻き上げて追い出すみたいなことになってしまう」
ぼくから家を巻き上げて追い出したんじゃないのか？

「行く当てはあるのかね？」

「いえ。まだ」

「そうだろうそうだろう」景気のいい声の持ち主はまた、さささっと両手をすり合わせた。今度は手を打ち合わせなかったので景気のいいぱんっという音が聞けなくてちょっと残念な気さえした。「どうだね、ひとつ、ここに住み続けるというのは」

あっけにとられて返事もできないでいるぼくを見て、景気のいい声の持ち主は、いまだかつて聞いたこともないほど景気のいい笑い声で、かんらんかんらと笑った。かんらんかんらという笑い声が文字の上だけでなく実際に存在するというのを、ぼくはこの日初めて知った。

「驚くのも無理はない。でも考えてご覧。こんなにさっぱり綺麗になった家で暮らすことを」それから景気のいい声の持ち主は、とびっきり景気のいい笑顔でぼくを覗き込んで、いたずらっぽく言うとうィンクした。「いままでの貴兄の部屋はどんな状態でした？」
「はあ、まあ、ぐちゃぐちゃでした」

「そうだろうそうだろう」景気のいい声の持ち主は、景気のいいカウントでうなずきつつ、ひどく感じ入ったような声で続けた。「だからアタシみたいなもんと関わることになってしまった。これは残念なことです。誰だってアタシみたいなもんと関わってロクなことはない。借りた金は一瞬でなくなる。利子は高い。悪い噂を立てられて友人は逃げていく。仕事場にもいたたまれなくなる。恋人を失う人や親に勘当される人もいる。挙げ句にこうして家からも追い立てられてしまう」

ぼくは、手際よく簡潔にまとめられた自分の不幸を聞かされて少し悲しくなったが、なにしろ景気のいい調子で語られるので不思議と悲惨な気はしなかった。まさしくこの部屋で過ごした日々は疫病神に取り憑かれた日々そのものだったのだ。

「でもね、アタシだってそれじゃ後味が悪い」景気のいい声の持ち主は、両手をぱっと広げて、まるで一年ぶりに都会から帰ってきた息子を抱きしめようとするイタリアの田舎のおっ母さんのような笑みを浮かべた。すこぶる景気がいい。「だから挽回のチャンスを、みなさんにさしあげているんですよ」

挽回のチャンスというのはつまり、景気のいい声の持ち主のもとで働くなら、このまま家にとどまれる、おまけにどんどんお金もたまる、という景気のいい話だった。一年後にはこんな鰻の寝床みたいなワンルームマンションじゃなく、もっと立派なオートロック付きの、新婚さんにも人気のデザイナーズマンションにだって移れるという景気のいい未来も示された。話を聞いているうちに本当に心が動くほど景気のいい話だったが、ぼくは断った。

「そうかねそうかね」景気のいい声の持ち主は、きらりと目を光らせてこう言った。「もちろん、選ぶのは貴兄の自由だ。アタシも無理強いはしない。ただし出て行くというのなら、ちょっと部屋を改めさせてもらうことになりますよ」

言うなり、景気のいい声の持ち主は身をひるがえし、景気のいい足さばきで狭い部屋の中を見て回り、部屋の突き当たりのベランダへの窓を開けてエアコンの室外機を指差し確認し、エアコンを作動させ、クローゼットを開け、上の方まで確認し、コンセント一つ一つに何かを差し込んで、コンロに火をつけ……と驚くほど無駄なくてきばきと部屋のすみずみまでチェックしてまわった。その隙のない点検ぶりを見て、ぼくはドキドキしてその場で倒れてしまいそうだった。気づかれるだろうか？ 気づかれるだろうか？

「素晴らしい！」景気のいい声がそう言った。「これ、貴兄が一人で片付けたのかね？」
「はい、そうです」
「なかなかここまできちんとできる人はいないものです」景気のいい声の持ち主は満足そうに言う、見事なまでの景気のいい笑みを浮かべ続けた。「ただ一点を除いてはね」
「え？」
「電話はどこです」

ぼくは手にしていた鞆をかかえこんだ。
「正直な方だ」景気のいい声の持ち主は短く言った。「あけなさい」
ぼくは鞆をあけた。汚く詰めこまれた衣類の影にぼくが何年も使い続けた黒電話が入っていた。景気のいい声の持ち主は目にもとまらぬ動作で黒電話を抜き取ると下駄箱の上においた。

「思い出が詰まっているというわけですか」
ぼくは黙ってうなずいた。そうだ。ぎっしり思い出が詰まっている。この6年ぶんの。
「でもこれは貴兄のものではない。備品です。持ち出すわけにはいかない」
「はい」
「さあ。これで全て確認できました。片付けご苦労様。貴兄の輝かしい未来を祈りますよ」

こうしてぼくは解放され、疫病神にとりつかれた6年間を過ごした部屋を離れることになった。これからは、自己流で身につけた陰陽師の力でどこまで食っていけるか試すことになる。そんなに簡単にうまくいくわけないが、構わない。ぼくの気は晴れている。なぜならぼくに寄り憑いた疫病神はあの黒電話に封じ込んだからだ。黒電話が再び電話回線につながった時、疫病神はそのそばにいた者に取り憑く。

ぼくから何もかも奪った景気のいい声の持ち主と、疫病神と、どちらの力の方が強いのか、その対決の瞬間を見てみたくもあるが、それは欲張り過ぎというものだろう。ワンルームマンションの敷地から出る時に、どこかから「ええ？」という景気の悪い声が聞こえた気がしたが、気のせいかもしれなかった。

(「電話」 ordered by tom-leo-zero-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

来[5][SFP0246]

<http://p.booklog.jp/book/45810>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45810>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45810>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.